日本文学全集 1

# 源氏物語

## 上

与謝野晶子訳

河出書房新社

日本文学全集 1 源氏物語(上)

© 1960

編集委員
青野季吉 荒 正人
川端康成 瀬沼茂樹
中島健蔵

装幀者
原 弘

N D C

昭和 35 年 7 月 1 日初版印刷
昭和 35 年 7 月 5 日初版発行

定価 290円

訳 者 与謝野晶子
発行者 河出孝雄
印刷者 中内佐光
印 刷:暁印刷株式会社
製 本:中央精版印刷株式会社
本文用紙:王子製紙工業株式会社
同納入:株式会社大和屋洋紙店
クロース:日本クロス工業株式会社
同納入:株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区神田小川町三の八 株式会社 河出書房新社
電話東京(291)3721~7
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

# 目次

## 源氏物語 上


桐壺（きりつぼ）……三
帚木（ははきぎ）……一八
空蟬（うつせみ）……四四
夕顔（ゆうがお）……五一
若紫（わかむらさき）……八〇
末摘花（すえつむはな）……一一一
紅葉賀（もみじのが）……一三〇
花宴（はなのえん）……一四六
葵（あおい）……一五三
榊（さかき）……一八〇
花散里（はなちるさと）……二〇八
須磨（すま）……二一一
明石（あかし）……二三六
澪標（みおつくし）……二五九
蓬生（よもぎう）……二七七
関屋（せきや）……二九〇

絵合……二九三
松風……三〇二
薄雲……三一五
朝顔……三三一
乙女……三四五
玉鬘……三七三
初音……三九七
胡蝶……四〇五
蛍……四一七

常夏……四二七
篝火……四四〇
野分……四四二
行幸……四五二
藤袴……四六七
真木柱……四七五
梅が枝……四九七
藤のうら葉……五〇八
若菜（上）……五二三

注釈　池田弥三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

# 源氏物語

上巻

# 桐壺

どの天皇様の御代であったか、女御とか更衣*とかいわれる後宮がおおぜいいた中に、最上の貴族出身ではないが深い御寵愛を得ている人があった。最初から自分こそはという自信と、親兄弟の勢力に恃むところがあって宮中にはいった女御たちからは失敬な女として嫉まれた。その人と同等、もしくはそれより地位の低い更衣たちはまして嫉妬の炎を燃やさないわけもなかった。夜の御殿の宿直所から退る朝、続いてその人ばかりが召される夜、目に見耳に聞いてくやしがらせた恨みのせいもあったかからだが弱くなって、心細くなった更衣は多く実家へ下がっていがちということになると、いよいよ帝はこの人にばかり心をお引かれになるという御様子で、人が何と批評をしようともそれに御遠慮などというものがおできにならない。御聖徳を伝える歴史の上にも暗い影の一所残るようなことにもなりかねない状態になった。高官たちも殿上役人たちも困って、御覚醒になるのを期しながら、当分は見ぬ顔をしていたいという態度をとるほどの御寵愛ぶりであった。唐の国でもこの種類の寵姫、楊家の女*の出現によって乱が醸されたなどと陰では言われる。今やこの女性が一天下の災いだとされるに至った。馬嵬の駅がいつ再現されるかもしれぬ。その人にとっては堪えがたいような苦しい雰囲気の中でも、ただ深い御愛情だけをたよりにして暮らしていた。父の大納言はもう故人であった。母の未亡人が生まれのよい見識のある女で、わが娘を現代に勢力のある派手な家の娘たちにひけを取らせないよき保護者たりえた。それでも大官の後援者を持たぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをするようだった。

前生の縁が深かったか、またもないような美しい皇子までがこの人からお生まれになった。寵姫を母とした御子を早く御覧になりたい思召しから、正規の日数がたつとすぐに更衣母子を宮中へお招きになった。小皇子はいかなる美なるものよりも美しい顔をしておいでになった。帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生まれになって、重い外戚が背景になっていて、疑いもない未来の皇太子として世の人は尊敬をささげているが、第二の皇子の美貌にならぶことがおできにならぬため、それは皇家の長子としてだいじにあそばされ、これは御自身の愛子

としてひじょうにだいじがっておいでになった。更衣ははじめから普通の朝廷の女官として奉仕するほどの軽い身分ではなかった、ただお愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女といってよいほどのりっぱな女ではあったが、しじゅうおそばへお置きになろうとして、殿上で音楽その他のお催し事をあそばす際には、たれよりもまず先にこの人を常の御殿へお呼びになり、またある時はお引き留めになって更衣が夜の御殿から朝の退出ができずそのまま昼も侍しているようなことになったりして、やや軽いふうにも見られたのが、皇子のお生まれになって以後目に立って重々しくお扱いになったから、東宮にもどうかすればこの皇子をお立てになるかもしれぬと、第一の皇子の御生母の女御は疑いを持っていた。この人は帝の最もお若い時に入内した最初の女御であった。この女御がする非難と恨み言だけは無関心にしておいでになれなかった。この女御へすまないという気もじゅうぶんに持っておいでになった。帝の深い愛を信じながらも、悪く言う者と、何かの欠点を捜し出そうとする者ばかりの宮中に、病身な、そして無力な家を背景としている心細い更衣は、愛されれば愛されるほど苦しみがふえるふうであった。

　住んでいる御殿は御所の中の東北の隅のような桐壺であった。幾つかの女御や更衣たちの御殿の廊を通い路にして帝がしばしばそこへおいでになり、宿直をする更衣が上がり下がりして行く桐壺であったから、しじゅう眺めていねばならぬ御殿の住人たちの恨みが暈んでいくのも道理と言わねばならない。召されることがあまり続くころは、打橋とか通い廊下のある戸口とかに意地の悪い仕掛けがされて、送り迎えをする女房たちの着物の裾が一度で痛んでしまうようなことがあったりする。またある時はどうしてもそこを通らねばならぬ廊下の戸に錠がさされてあったり、そこが通れねばこちらを行くはずの御殿の人どうしが言い合わせて、桐壺の更衣の通り路をなくして辱しめるようなことなどもしばしばあった。数えきれぬほどの苦しみを受けて、更衣が心を滅入らせているのを御覧になると帝はいっそう憐れを多くお加えになって、清涼殿に続いた後涼殿に住んでいた更衣を外へお移しになって、桐壺の更衣へ休息室としてお与えになった。移された人の恨みはどの後宮よりもまた深くなった。

　第二の皇子が三歳におなりになった時に袴着*の式が行なわれた。前にあった第一の皇子のその式に劣らぬような派手な準備の費用が宮廷から支出された。それにつけても世間はいろいろに批評をしたが、成長されるこの皇子の美貌と聡明さとが類のないものであったから、だれも皇子を悪く思うことはできなかった。有識者はこの天

才的な美しい小皇子を見て、こんな人も人間世界に生まれてくるものかと皆驚いていた。その年の夏のことである。御息所（皇子女の生母になった更衣はこう呼ばれるのである）はちょっとした病気になって、実家へさがろうとしたが、帝はお許しにならなかった。どこかからだが悪いということはこの人の常のことになっていたから、帝はそれほどお驚きにならずに、

「もうしばらく御所で養生をしてみてからにするがよい」

と言っておいでになるうちにしだいに悪くなって、そうなってからほんの五六日のうちに病は重体になった。母の未亡人は泣く泣くお暇を願って帰宅させることにした。こんな場合にはまたどんな呪詛が行なわれるかもしれない、皇子にまで災いを及ぼしてはとの心づかいから、皇子だけを宮中に留めて、目立たぬように御息所だけが退出するのであった。このうえ留めることは不可能であると帝は思召して、更衣が出かけて行くところを見送ることのできぬ御尊貴の御身の物足りなさを堪えがたく悲しんでおいでになった。

はなやかな顔だちの美人がひじょうに痩せてしまって、心の中には帝とお別れして行く無限の悲しみがあったが口へは何も出して言うことのできないのがこの人の性質である。あるかないかに弱っているのを御覧になると帝は過去も未来もまっ暗になった気があそばすのであった。泣く泣くいろいろなたのもしい将来の約束をあそばされても更衣はお返辞もできないのである。目つきもよほどだるそうで、平生からなよなよとした人がいっそう弱々しいふうになって寝ているのであったから、これはどうなることであろうという不安が大御心を襲うた。更衣が宮中から輦車で出てよい御許可の宣旨を役人へお下しになったりあそばされても、また病室へお帰りになると今行くということをお許しにならない。

「死の旅にも同時に出るのがわれわれ二人であるとあなたも約束したのだから、私を置いて家へ行ってしまうことはできないはずだ」

と、帝がお言いになると、そのお心もちのよくわかる女も、ひじょうに悲しそうにお顔を見て、

「限りとて別るる道の悲しきに
　いかまほしきは命なりけり

死がそれほど私に迫って来ておりませんのでしたら」

これだけのことを息も絶え絶えに言って、なお帝にお言いしたいことがありそうであるが、まったく気力はなくなってしまった。死ぬのであったらこのまま自分のそばで死なせたいと帝は思召したが、今日から始めるはずの祈禱も高僧たちが承っていて、それもぜひ今夜から始めねばなりませぬというようなことも申し上げて方々か

ら更衣の退出を促すので、別れがたく思召しながらお帰しになった。

帝はお胸が悲しみでいっぱいになってお眠りになることが困難であった。帰った更衣の家へお出しになる尋ねの使はすぐ帰って来るはずであるが、それすら返辞を聞くことが待ちどおしいであろうと仰せられた帝であるのに、御使は、

「夜半過ぎにお卒去になりました」

と言って、故大納言家の人たちの泣き騒いでいるのを見ると力が落ちてそのまま御所へ帰って来た。

更衣の死をお聞きになった帝のお悲しみは非常で、そのまま引籠っておいでになった。その中でも忘れがたみの皇子はそばへ置いておきたく思召したが、母の忌服中の皇子が、穢れのやかましい宮中においでになる例などはないので、更衣の実家へ退出されることになった。皇子はどんな大事があったともお知りにならず、侍女たちが泣き騒ぎ、帝のお顔にも涙が流れてばかりいるのだけをふしぎにお思いになるふうであった。父子の別れというようなことはなんでもない場合でも悲しいものであるから、この時の帝のお心もちほどお気の毒なものはなかった。

どんなに惜しい人でも遺骸は遺骸として扱われねばならぬ、葬儀が行なわれることになって、母の未亡人は遺骸と同時に火葬の煙になりたいと泣き焦がれていた。そして葬送の女房の車にしいて望んでいっしょに乗って愛宕の野にいかめしく設けられた式場へ着いた時の未亡人の心はどんなに悲しかったであろう。

「死んだ人を見ながら、やはり生きている人のように思われてならない私の迷いをさますために行く必要があります」

と賢そうに言っていたが、車から落ちてしまいそうに泣くので、こんなことになるのを恐れていたと女房たちは思った。

宮中から御使が葬場へ来た。更衣に三位を贈られたのである。勅使がその宣命を読んだ時ほど未亡人にとって悲しいことはなかった。三位は女御に相当する位階である。生きていた日に女御とも言わせなかったことが帝には残り多く思召されて贈位を賜わったのである。こんなことででも後宮のある人々は反感を持った。同情のある人は故人の美しさ、性格のなだらかさなどで憎むことのできなかった人であると、今になって桐壺の更衣の真価を思い出していた。あまりにひどい御殊寵ぶりであったがらその当時は嫉妬を感じたのであるとそれらの人は以前のことを思っていた。優しい同情深い女性であったのを、帝付きの女官たちは皆恋しがっていた。「なくてぞ人は恋しかりける」とはこうした場合のことであろうと

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook

見えた。時は人の悲しみにかかわりもなく過ぎて七日七日の仏事がつぎつぎに行なわれる、そのたびに帝からはお弔いの品々が下された。

愛人の死んだ後の日がたっていくにしたがってどうしようもない寂しさばかりを帝はお覚えになるのであって、女御、更衣を宿直に召されることも絶えてしまった。ただ涙の中の御朝夕であって、拝見する人までが湿っぽい心になる秋であった。

「死んでからまでも人の気を悪くさせる御寵愛ぶりね」

などと言って、右大臣の娘の弘徽殿の女御などは今さえも嫉妬を捨てなかった。帝は一の皇子を御覧になっても更衣の忘れがたみの皇子の恋しさばかりをお覚えになって、親しい女官や、御自身のお乳母などをその家へおつかわしになって若宮の様子を報告させておいでになった。

野分ふうに風が出て肌寒の覚えられる日の夕方に、平生よりもいっそう故人がお思われになって、靫負の命婦という人を使としてお出しになった。夕月夜の美しい時刻に命婦を出かけさせて、そのまま深い物思いをしておいでになった。以前にこうした月夜は音楽の遊びが行なわれて、更衣はその一人に加わってすぐれた音楽者の素質を見せた。またそんな夜に詠む歌なども平凡ではなかった。彼女の幻は帝のお目に立ち添って少しも消えない。しかしながらどんなに濃い幻でも瞬間の現実の価値はないのである。

命婦は故大納言家に着いて車が門から中へ引き入れられた刹那からもう言いようのない寂しさが味わわれた。未亡人の家であるが、一人娘のために住居の外見などにもみすぼらしさがないようにと、りっぱな体裁を保って暮らしていたのであるが、子を失った女主人の無明の日が続くようになってからは、しばらくのうちに庭の雑草が行儀悪く高くなった。またこのごろの野分の風でいっそう邸内が荒れた気のするのであったが、月光だけは伸びた草にもさわらずさしこんだその南向きの座敷に命婦を招じて出て来た女主人はすぐにも物が言えないほどまたも悲しみに胸をいっぱいにしていた。

「娘を死なせました母親がよくも生きていられたものというように、運命がただ恨めしゅうございますのに、こうしたお使があばら家へおいでくださるとまたいっそう自分がはずかしくてなりません」

と言って、実際堪えられないだろうと思われるほど泣く。

「こちらへ上がりますと、またいっそうお気の毒になりまして、魂も消えるようでございますと、先日典侍は陛下へ申し上げていらっしゃいましたが、私のような浅薄な人間でもほんとうに悲しさが身に沁みます」

と言ってから、しばらくして命婦は帝の仰せを伝えた。

『当分夢ではないであろうかというようにばかり思われましたが、ようやくおちつくとともに、どうしようもない悲しみを感じるようになりました。こんな時はどうすればよいのか、せめて話し合う人があればいいのですがそれもありません。目立たぬようにして時々御所へ来られてはどうですか。若宮を長く見ずにいて気がかりでならないし、また若宮も悲しんでおられる人ばかりの中にいてかわいそうですから、彼を早く宮中へ入れることにして、あなたもいっしょにおいでなさい』

「こういうお言葉ですが、涙にむせ返っておいでになって、しかも人に弱さを見せまいと御遠慮をなさらないでもない御様子がお気の毒で、ただおおよそだけを承っただけで参りました」

と言って、また帝のお言づてのほかの御消息を渡した。

「涙でこのごろは目も暗くなっておりますが、過分なかたじけない仰せを光明にいたしまして」

未亡人はお文を拝見するのであった。

時がたてば少しは寂しさも紛れるであろうかと、そんなことを頼みにして日を送っていても、日がたてばたつほど悲しみの深くなるのは困ったことである。どうしているかとばかり思いやっている小児も、揃った両親に育てられる幸福を失ったものであるから、子を失ったあなたに、せめてその子の代わりとしてめんどうを見てやってくれることを頼む。

など細々と書いておありになった。

宮城野の露吹き結ぶ風の音に
小萩が上を思ひこそやれ

という御歌もあったが、未亡人は湧き出す涙が妨げて明らかには拝見することができなかった。

「長生きをするからこうした悲しい目にも会うのだと、それが世間の人の前に私をきまりわるくさせることなのでございますから、まして御所へ時々上がることなどは思いもよらぬことでございます。もったいない仰せを伺っているのですが、私が伺候いたしますことは今後も実行はできないでございましょう。若宮様は、やはり御父子の情というものが本能にありますものと見えて、御所へ早くおはいりになりたい御様子をお見せになりますから、私は御道理だとおかわいそうに思っておりますということなどは、表向きの奏上でなしに何かのおついでに申し上げてくださいませ。良人も早く亡くしますし、娘も死なせてしまいましたような不幸ずくめの私がごいっしょにおりますことは、若宮のために縁起のよろしくないことと恐れ入っております」

などと言った。そのうち若宮ももうおやすみになった。

「またお目ざめになりますのをお待ちして、若宮にお目にかかりまして、くわしく御様子も陛下へ御報告したい

のでございますが、使の私の帰りますのをお待ちかねでもいらっしゃいますでしょうから、それではあまりおそくなるでございましょう」
と言って命婦は帰りを急いだ。
「子を失くしました母親の心の、悲しい暗さがせめて一部分でも晴れますほどの話をさせていただきたいのですから、公のお使でなく、気楽なお気もちでお休みがてらまたお立ち寄りください。以前はうれしいことでよくお使においでくださいましたのでしたが、こんな悲しい勅使であなたをお迎えするとはなんということでしょう。かえすがえす運命が私に長生きさせるのが苦しゅうございます。故人のことを申せば、生まれました時から親たちに輝かしい未来の望みを持たせました子で、父の大納言はいよいよ危篤になりますまで、この人を宮中へ差し上げようと自分の思ったことをぜひ実現させてくれ、自分が死んだからといって今までの考えを捨てるようなことをしてはならないと、何度も何度も遺言いたしましたが、確かな後援者なしの宮仕えは、かえって娘を不幸にするようなものではないだろうかとも思いながら、私にいたしましてはただ遺言を守りたいばかりに陛下へ差し上げましたが、過分な御寵愛を受けまして、そのお光でみすぼらしさも隠していただいて、娘はお仕えしていたのでしょうが、皆さんの御嫉妬の積もっていくのが重荷になりまして、寿命で死んだとは思えませんような死に方をいたしましたのですから、陛下のあまりに深い御愛情がかえって恨めしいように、盲目的な母の愛から私は思いもいたします」
　こんな話をまだ全部も言わないで未亡人は涙でむせ返ってしまったりしているうちにますます深更になった。
「それは陛下も仰せになります。自分の心でありながらあまりに穏やかでないほどの愛しようをしたのも前生の約束で長くはいっしょにいられぬ二人であることを意識せずに感じていたのだ。自分らは恨めしい因縁でつながれていたのだ。自分は即位してから、だれのためにも苦痛を与えるようなことはしなかったという自信を持っていたが、あの人によって負ってならぬ女の恨みを負い、ついには何よりもたいせつなものを失って、悲しみにくれて以前よりももっと愚劣な者になっているのを思うと、自分らの前生の約束はどんなものであったか知りたいとお話しになって湿っぽい御様子ばかりお見せになっています」
　どちらも話すことにきりがない。命婦は泣く泣く、
「もうひじょうにおそいようですから、復命は今晩のうちにいたしたいとぞんじますから」
と言って、帰る仕度をした。落ちぎわに近い月夜の空が澄みきった中を涼しい風が吹き、人の悲しみを促すよう

な虫の声がするのであるから帰りにくい。

　鈴虫の声の限りを尽くしても
　　長き夜飽かず降る涙かな

車に乗ろうとして命婦はこんな歌を口ずさんだ。

「いとどしく虫の音しげき浅茅生に
　　露置き添ふる雲の上人

かえって御訪問が恨めしいと申し上げたいほどです」

と未亡人は女房に言わせた。意匠を凝らせた贈物などする場合でなかったから、故人の形身ということにして、唐衣と裳の一揃えに、髪上げの用具のはいった箱を添えて贈った。

若い女房たちの更衣の死を悲しむのは無論であるが、宮中住居を仕慣れていて、寂しく物足らず思われることが多く、お優しい帝の御様子を思ったりして、若宮が早く御所へお帰りになるようにと促すのであるが、不幸な自分がごいっしょに上がっていることも、また世間に非難の材料を与えるようなものであろうし、またそれかといって若宮とお別れしている苦痛にも堪えきれる自信がないと未亡人は思うので、結局若宮の宮中入りは実行性に乏しかった。

御所へ帰った命婦は、まだ宵のままで御寝室へはいっておいでにならない帝を気の毒に思った。中庭の秋の花の盛りなのを愛していらっしゃるふうをあそばして凡庸でない女房四五人をおそばに置いて話をしておいでになるのであった。このごろじゅう帝の御覧になるものは、玄宗皇帝と楊貴妃の恋を題材にした白楽天の長恨歌を、亭子院*が絵にあそばして、伊勢や貫之に歌をお詠ませになった巻物で、そのほか日本文学でも、支那のでも、愛人に別れた人の悲しみが歌われたものばかりを帝はお読みになった。帝は命婦にこまごまと大納言家の様子をおききになった。身に沁む思いを得て来たことを命婦は外へ声をはばかりながら申し上げた。未亡人の御返書を帝は御覧になる。

もったいなさをどうしまついたしてよろしゅうございますやら。こうした仰せを承りましても愚か者はただ悲しい悲しいとばかり思われるのでございます。

　荒き風防ぎし陰の枯れしより
　　小萩が上ぞしづ心無き

というような、歌の価値の疑わしいような物も書かれてあるが、悲しみのためにおちつかない心で詠んでいるのであるからと寛大に御覧になった。帝はある程度までは抑えていねばならぬ悲しみであると思召すが、それが御困難であるらしい。はじめて桐壺の更衣の上がってきたころのことなどまでがお心の表面に浮かび上がってきてはいっそう暗い悲しみに帝をお誘いした。その当時しばらく別れているということさえも自分にはつらかったの

に、こうして一人でも生きていられるものであると思うと自分は偽り者のような気がするとも帝はお思いになった。

「死んだ大納言の遺言を苦労して実行した未亡人への報いは、更衣を後宮の一段高い位置に据えることだ、そうしたいと自分はいつも思っていたが、何もかも皆夢になった」

とお言いになって、未亡人に限りない同情をしておいでになった。

「しかし、あの人はいなくても若宮が天子にでもなる日が来れば、故人に后の位を贈ることもできる。それまで生きていたいとあの夫人は思っているだろう」

などという仰せがあった。命婦は贈られた物を御前へ並べた。これが唐の幻術師が他界の楊貴妃に会って得て来た玉の簪であったらと、帝はかいないこともお思いになった。

尋ね行くまぼろしもがなつてにても
　魂のありかをそこと知るべく

絵で見る楊貴妃はどんなに名手の描いたものでも、絵における表現は限りがあって、それほどのすぐれた顔も持っていない。太液の池の蓮花にも、未央宮の柳の趣にもその人は似ていたであろうが、また唐の服装は華美ではあったであろうが、更衣の持った柔らかい美、艶な姿態をそれに思い比べて御覧になると、これは花の色にも鳥の声にもたとえられぬ最上のものであった。お二人の間はいつも、天に在っては比翼の鳥　地に生れれば連理の枝という言葉で永久の愛を誓っておいでになったが、運命はその一人に早く死を与えてしまった。秋風の音にも虫の声にも帝が悲しみを覚えておいでになるとき、弘徽殿の女御はもう久しく夜の御殿の宿直にもお上がりせずにいて、今夜の月明にふけるまでその御殿で音楽の合奏をさせているのを帝は不愉快に思召した。このごろの帝のお心もちをよく知っている殿上役人や帝づきの女房なども皆弘徽殿の楽音に反感を持った。負けぎらいな性質の人で更衣の死などは眼中にないというふうをわざと見せているのであった。

月も落ちてしまった。

雲の上も涙にくるる秋の月
　いかですむらん浅茅生の宿

命婦が御報告した故人の家のことをなお帝は想像あそばしながら起きておいでになった。

右近衛府の士官が宿直者の名を披露するのをもってすれば午前二時になったのであろう。人目をおはばかりになって御寝室へおはいりになってからも安眠を得給うことはできなかった。

朝のお目ざめにもまた、夜明けも知らずに語り合った

昔の御追憶がお心を占めて、寵姫の在った日も亡い後も朝の政務はお怠りになることになる。お食欲もない。簡単な御朝食はしるしだけお取りになるが、帝王の御朝餐として用意される大床子のお料理などは召し上がらないものになっていた。それには殿上役人のお給仕がつくのであるが、それらの人は皆この状態を嘆いていた。すべて側近する人は男女の別なしに困ったことであると嘆いた。よくよく深い前生の御縁で、その当時は世の非難も後宮の恨みの声もお耳には留まらず、その人に関することだけは正しい判断を失っておしまいになり、また死んだ後ではこうして悲しみに沈んでおいでになって政務も何もお顧みにならない、国家のためによろしくないことであるといって、支那の歴朝の例までも引き出して言う人もあった。

　幾月かの後に第二の皇子が宮中へおはいりになった。ごくお小さい時ですらこの世のものとはお見えにならぬ御美貌の備わった方であったが、今はまたいっそう輝くほどのものに見えた。その翌年立太子のことがあった。帝の思召しは第二の皇子にあったが、だれという後見の人がなく、まただれもが肯定しないことであるのを悟っておいでになって、かえってその地位は若宮の前途を危険にするものであるとお思いになって、御心中をだれにもお漏らしにならなかった。東宮におなりになったのは第一親王である。この結果を見て、あれほどの御愛子でもやはり太子にはおできにならないのだと世間も言い、弘徽殿の女御も安心した。その時から宮の外祖母の未亡人は落胆して更衣のいる世界へ行くことのほかには希望もないと言って一心に御仏の来迎を求めて、とうとう亡くなった。帝はまた若宮が祖母を失われたことでお悲しみになった。これは皇子が六歳の時のことであるから、今度は母の更衣の死に会った時とは違い、皇子は祖母の死を知ってお悲しみになった。今までしじゅうお世話を申していた宮とお別れするのが悲しいということばかりを未亡人は言って死んだ。

　それから若宮はもう宮中にばかりおいでになることになった。七歳の時に書初めの式が行なわれて学問をお始めになったが、皇子の類のない聡明さに帝はお驚きになることが多かった。

「もうこの子をだれも憎むことができないでしょう。母親のないという点だけでもかわいがってやりなさい」

と帝はお言いになって、弘徽殿へ昼間おいでになる時もいっしょにおつれになったりしてそのまま御簾の中にまでもお入れになった。どんな強さ一方の武士だっても仇敵だってもこの人を見ては笑みが自然に湧くであろうと思われる美しい少童でおありになったから、女御も愛を覚えずにはいられなかった。この女御は東宮のほかに姫

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook